

ロシア語名詞アクセントのゆれと動態に関する  
予備調査(1) —第2変化名詞—

安 藤 智 子

富山大学人文学部紀要第55号抜刷

2011年8月

## ロシア語名詞アクセントのゆれと動態に関する 予備調査(1)―第2変化名詞―

安藤 智子

### 1. はじめに

現代ロシア語において、アクセントの位置は発話者によって異なる場合がある。さらに、辞書を見ても、2通り以上のアクセントの位置が許される語があったり、辞書によって異なるアクセントが示される語があったりする。正音法に関する辞典類を見ると、やはり2通り以上のアクセントの位置が許される語もあるし、一方のアクセントが標準的であって他方は誤りであるとか、特定の専門分野の人の発話に現れるものだという記述がある語もある。また、一方が現在の標準であって他方は旧式の発音、あるいは廃れつつある発音であるとされる語もある。

ロシア語のアクセントは、通時的研究の成果として、古代のアクセントと対応させて規則的に予測できるものもあるが、現代では類推や借用語の流入などによって古代とは切り離さなければ説明のつかないものも多い。Воронцова (1979) など、近・現代のアクセントの変遷についての通時的研究もあり、一定の変化の型があることが明らかになっている。

本稿は、こうした変化を続ける現代ロシア語のアクセントについて、変化の方向性を明らかにしようとする試みの一端である。上記の近・現代の変遷についての先行研究は30年以上前のものであり、ここで扱われた語彙のその後の変遷や、新たに使用されるようになった語のアクセントがどのようにになっているかを調べることを目的としている。このような研究は、話者の年齢層・社会層・地域方言・専門分野などを考慮して発話の実地調査を行うことにより精度の高い結論が得られるが、そうした調査を行うにしても、まず調査語彙を厳選する必要がある。そのための予備調査として、本稿では、上記の先行研究と近年の正音法辞典類を見比べ、文献上の変化を整理したい。本稿では、パラダイム内でのアクセント移動の型が複雑な、第2変化名詞（単数主格形が -a または -я (/a/) に終わる女性名詞がほとんどであるが、同じ屈折形態を持つ男性名詞を含む）を対象とする。他のタイプの名詞については、稿を改めて論じる予定である。

本稿の構成は以下のとおりである。まず、第2節において、これまでに論じられている第2変化名詞のアクセント変化の方向性について、18世紀から20世紀中盤にかけてのアクセント変化を記述した Воронцова (1979) を中心に紹介する。第3節では、20世紀終盤以降の正音法辞典において第2節で扱った語彙がどのように扱われているかを検討し、最近のアクセントの動態について考察する。第4節では、ロシア語の「難しい点」を集めた Горбачевич (2004) に取り

上げられている語彙について、アクセントの位置のゆれや変化にどのような傾向が見られるかを調査する。第5節は、本稿のまとめとする。

## 2. 18世紀から20世紀中盤のアクセント変化

本節では、18世紀から20世紀中盤にかけてのアクセント変化を文献調査を基に記述した Воронцова (1979) を中心に、通時的研究におけるアクセント記述の枠組みとそこからの変化について先行研究を整理する。

### 2.1. ロシア語名詞のアクセントの概要

ここではまず、ロシア語の名詞のパラダイムにおける主要なアクセントの型を紹介し、後の議論の土台とする。

#### 2.1.1. アクセント型の呼称

現代においても古代においても、ロシア語における名詞のアクセントは、パラダイムを通じて同じ音節にストレスを持つ固定アクセント型と、屈折形態によりストレスの位置が異なる移動アクセント型に分けられる。固定アクセント型には、語幹にストレスを持つものと屈折語尾にストレスを持つものがある。多くの先行研究 (Зализняк (1985) 等) において、語幹にストレスを持つ固定アクセント型をA型、屈折語尾にストレスを持つ固定アクセント型をB型、移動アクセント型をC型と呼んでいる。(1) に現代語形によるA型、B型パラダイムの例を示す。B型の例において、複数生格形のストレスが語幹末音節に現れるが、これは屈折語尾がゼロ形態であるため語幹末音節が代わりにストレスを担うものであると考えられ、このようなストレスの位置を仮アクセントと呼ぶ。

##### (1) 第2変化名詞A型の例 ‘побед-а’ 「勝利」

単数主格 по'бед-а 生格 по'бед-ы 与格 по'бед-е 対格 по'бед-у

造格 по'бед-ой 前置格 по'бед-е

複数主格 по'бед-ы 生格 по'бед-∅ 与格 по'бед-ам 対格 (=複数主格)

造格 по'бед-ами 前置格 по'бед-ах

##### 第2変化名詞B型の例 ‘тамад-а’ 「宴会の幹事」

単数主格 тамад-'а 生格 тамад-'ы 与格 тамад-'е 対格 тамад-'у

造格 тамад-'ой 前置格 тамад-'е

複数主格 тамад-'ы 生格 та'мад-∅ 与格 тамад-'ам 対格 (=複数生格)

造格 тамад-'ами 前置格 тамад-'ах

第2変化名詞の場合、本来のC型では、典型的には(2)のようにストレス位置が移動する。(3)

はその例である。この場合も、複数生格形は仮アクセントである。

(2) 語頭音節：単数対格形、複数主格形および対格形

語幹末尾音節：複数生格形

屈折語尾の第1音節：単数形のうち対格以外の格、複数与格形・造格形・前置格形

(3) 第2変化名詞C型の例 ‘сторон-’a「方向」

単数主格 сторон-’a 生格 сторон-’ы 与格 сторон-’е 対格’сторон-у

造格 сторон-’ой 前置格 сторон-’е

複数主格’сторон-ы 生格 сто’рон-∅ 与格 сторон-’ам 対格 (=複数主格)

造格 сторон-’ами 前置格 сторон-’ах

このように、本来のC型では、単数形においても複数形においてもそれぞれのうちでストレスが移動する。しかし、現代語においては、単数形か複数形のどちらかだけが移動アクセントを示す語や、単数のすべての格で語尾、複数のすべての格で語幹にストレスを持つような語が存在し、そのようなパラダイムのアクセント型を示すために、単数・複数の順でA、B、Cの記号をそれぞれ表示する方法も用いられている(Федянина(1982)等)。例えば、本来のC型は単複共にストレスが移動するのでCC型と表示され、単数対格と複数のすべての格で語幹、単数のその他の格で屈折語尾にストレスを持つ語はCA型と表示される。本稿では現代語を扱うにあたって、この表示方法を用いることにする。

なお、ロシア語の名詞には、特定の語結合において他の場合とは異なる位置にストレスが置かれる場合や、特定の前置詞句において名詞がストレスを持たず前置詞がストレスを持つ場合がある。本稿では、全体的な傾向を見るため、これらの現象については割愛する。

### 2.1.2. 各アクセント型の所属語彙とゆれ

まず、各アクセント型の所属語彙の分布を見ると、語幹固定アクセント(A型)が圧倒的多数を占める。古代ロシア語におけるB型およびC型については、Воронцова(1979)が通時的な先行研究(Иплич-Свитыч(1963), Колесов(1972), Хазагерев(1973))を元に非派生語の所属語彙を見出し、さらに現代標準語で用いられない語を除いた所属語彙を選定している。それによると、第2変化名詞のB型は34語、C型は60語である。

一方、借用語や合成語を多く含む現代語について、Федянина(1982)は第2変化名詞の各型の所属語彙数を、AA型10700語、BB型410語、BA型120語、AC型2語、BC型35語、CC型13語、CA型12語としている。上述のとおり、現代語のアクセントにはゆれが頻繁に観察されるため、このФедянина(1982)のデータも唯一絶対のものではないが、現代語の傾向を見ることはできる。すなわち、多くの借用語や合成語を含むAA型が圧倒的多数を占め、最も生産的である一方、BB型は生産的とは言えないが、特に、東方や教会スラヴ語からの使用頻度の低い借用語や特

定の接尾辞を持つ派生語を中心に第2位の所属語彙数を示す。また、全体の語彙数が増えている中で、旧来の移動アクセント（CC型）の語彙はВоронцова (1979) のC型のリストよりむしろ減少していることがわかる。さらに、BA型が移動アクセント型全体の中で3分の2近くを占め、この型へのアクセント変化の傾向があることが注目に値する。

なお、所属語彙が圧倒的に多いAA型については、生産的であり、他の型への変化が個別的なものにすぎないことから、以下、第2節および第3節では扱わないことにする。

## 2.2. 通時的研究に見る移動アクセント型の変遷

前節で触れたВоронцова (1979) は、通時的研究を基に選定したB・Cアクセント型所属語彙を18世紀以降の詩において例証するほか、Востоков (1831)、19世紀前半を扱ったБулаховский (1954)、Чернышев (1908) 等の先行研究および20世紀中盤までの辞書（Ушаков編 (1934-40)、Аванесов, Ожегов編 (1959)）における記述をこれと比較している。このうち、本節では移動アクセント型（C型）として選定された語彙について見ていく。Воронцова (1979) が先行研究から古代ロシア語における移動アクセント型（подвижная акцентная парадигма）として見出し、現代標準語で用いられない語を除いた語彙は(4)の60語である。

(4) блоха, борода, борозда, верста, весна, вода, волна, голова, гора, гроза, грядя, десна, доска, душа, железа, заря, звезда, земля, зима, зола, игла, изба, икра, коза, коса, косма, кроха, кума, лоза, луна, межа, метла, нога, ноздря, нора, овца, оса, пола, полоса, пора, пчела, пята, роса, руда, рука, свинья, семья, середя, сковорода, слеза, слобода, смола, сноха, соха, сторона, стрела, строка, цена, черта, щека

結論から言えば、Воронцова (1979) は、これらの語の単数対格形のストレスが語幹から屈折語尾へ、複数斜格（与格・造格・前置格）形のストレスが語尾から語幹へと変化してきていることを指摘している。つまり、CC型からBA型への変化である。この指摘の根拠の一部を次に挙げる。

まず、単数対格形について言えば、上の60語のうち、旧来の移動アクセント型のとおり言語頭にストレスを持つことが例証されるものは、18世紀の詩において29語あるが、うち6語は屈折語尾にストレスを持つ例も観察され、ゆれがあるとされる。18世紀の詩において例証されない語のうち18語は、Востоков (1831) において語幹にストレスを持つとされるが、詩においても例証されず、Востоков (1831) でも語幹にストレスを持つとされない8語は、18世紀に単数形での移動アクセントがすでに標準的ではなかった（すなわち単数形全体が語尾にストレスを持っていた）と見ることができるとВоронцова (1979: 36) は述べている。

また、18世紀の詩において単数対格形で語幹にストレスを持つ語については、19世紀、20世紀の詩においては、ゆれの中で次第に語尾にアクセントを持つ例の割合が増えていくことが

指摘されている (Воронцова (1979: 38f))。

さらに、詩とは異なり網羅的な記述を持つ19世紀のВостоков (1831) では、この60語のうち42語に加えて、このリストにない11語も語幹にストレスを持つ (合計53語) とされている。18世紀の詩の資料において語幹にストレスを持っていた語の中でВостоков (1831) では語幹にストレスを持つとされない語が8語あることから、語尾へのストレスの変化が窺える。

Чернышев (1908) は19世紀の伝統に規範を置いたものとされるが、単数対格形で語幹にストレスを持つ語の数はВостоков (1831) の53語からさらに減って、36語 (このほかにゆれのある語が4語) となる。1930年代の規範を示したУшаков編 (1934-40) の辞書では、これに1語を加えるが13語が減り、この他にゆれないし意味の分化による2通りのアクセントを持つものが9語あるとされる。さらに、1950年代のАванесов, Ожегов編 (1959) の辞書では21語<sup>1)</sup> (この他にゆれを持つものが4語) となる。このように、単数対格形で語頭にストレスを持つものは、18世紀から20世紀半ばまでの間に確実に数を減らしてきたことがわかる。

次に、複数斜格形の変化について整理する。複数斜格 (与格・造格・前置格) 形では、単数対格形の場合とは逆に、旧来の移動アクセント型では屈折語尾にストレスを持つ。Воронцова (1979: 42f) によれば、18世紀の詩において、複数与格・造格・前置格のいずれかで屈折語尾にストレスの置かれた形が例証されるのは(4)の60語のうち17語あるが、語幹にストレスが置かれた例はない。19世紀の詩でも、これらの格で語幹にストレスを持つ例は個別的であり、詩では20世紀初頭になって初めて語幹へのストレスの変化がまとまって現れるという。Воронцова (1979: 44) は当時の詩において *борона, доска, гора, полоса* が複数斜格で語幹にストレスを持つことは比較的稀であるものの、全体的にはこの変化は進行しているとしている。

Воронцова (1979) の記述によれば、Ушаков編 (1934-40) の辞書では、18語が複数斜格形で語幹にストレスをもち、5語が語幹と語尾の間でゆれを持つとされる。前者のうち、13語は単数対格形で語尾にストレスをもち、規範形がBA型に到達している。Аванесов, Ожегов編 (1959) の辞書ではさらにゆれを持つものを伴ってBA型が増加している。

### 2.3. 通時的研究に見る語尾固定アクセント型の変遷

Воронцова (1979) が通時的研究を基に選定した各アクセント型所属語彙のうち、本節では古代語において語尾固定アクセント型 (B型) (окситонированная акцентная парадигма) として選定された語彙について検討する。Воронцова (1979) が先行研究から古代ロシア語における語尾固定型アクセント型として見出し、現代標準語で用いられない語を除いた語彙は(5)の34語である。

(5) беда, вдова, вина, война, дуга, дыра, жена, змея, игра, коса 「大鎌」, лиса, лука, пила, река, свеча, сестра, скала, скорлупа, скула, слуга, стрекоза, сова, стопа, струя, судьба, судья, толпа, трава,

тропа, труба, тюрьма, узда, черта, щепя

このタイプに見られる顕著な変化の流れも、移動アクセント型の場合（2.2節）と同じく、BA型への変化であると言える。すなわち、複数形全体が語尾アクセントから語幹アクセントへ変化する傾向である。

Воронцова (1979) によれば、18世紀の詩では複数主格（および同形の対格）形においても斜格形においても基本的に語尾にストレスを持つが、複数主格形では7語において語幹にストレスを持つ場合が少数ながら例証される。これに対し、斜格形では1例が語幹にストレスを持つのみである。19世紀の詩では、複数主格形では6語で語尾にストレスを持つ形のみ、7語で語頭にストレスを持つ形のみ、5語で両方のストレス位置が例証され、拮抗するが、斜格形ではようやく6語で語幹にストレスを持つ例が出現する。20世紀の詩では、主格形では語尾にストレスを持つ例が6語にしか見出されず、ほとんどは語幹にストレスを持つようになって逆転するが、斜格形では語幹にストレスを持つ例がやや増してようやく8語となったところである。

Воронцова (1979) の記述によれば、網羅的な記述を持つ19世紀のВостоков (1831) では、複数主格形において18語が過渡的 (переносное ударение) であり、14語が語尾にストレスを持つとされるものと見られる。一方、斜格形では、これらの語がすべて語尾にストレスを持つとされている。ところが、1930年代の規範を示したУшаков編 (1934-40) の辞書では、複数主格形において3語でゆれが見られ、1語で語尾にストレスを持つほかは語幹にストレスを持つことになっており、斜格形でも17語が語幹にストレスを置く新しいアクセントを持つとされる。さらにАванесов, Ожегов編 (1959) の辞書でもこの傾向は続く。

このように、Воронцова (1979) の文献調査から、ここで扱った範囲の語彙では、旧来の語尾固定アクセント型もほとんどBA型に変化したことがわかる。その過程で、複数主格形が複数斜格形よりも早く語幹にストレスを移していることから、元来異なるアクセント型である旧移動アクセント型の語彙のパラダイムからの類推が起こったと推察することができよう。BB型からBA型への変化では変わる必要のない単数対格形についても、旧来の移動アクセント型からの類推によって語幹にストレスを置く形が19世紀まで広がりを見せ、20世紀に語尾アクセントに回帰した様子がВоронцова (1979: 59f) によって指摘されている。

以上、古代語の語尾固定アクセント型として選定された語彙について検討してきたが、このアクセント型を示す（あるいは示していた）語彙は、古代からの非派生固有語のほかに、借用語と派生語がある。

Воронцова (1979: 54) によれば、この型の借用語の中ではトルコ語からのものが最も多く、他に教会スラブ語・ポーランド語・ギリシア語からのものなどがあるという。こうした語彙は、語尾固定アクセントのままのものもあれば、古代語と同様にBA型に向けて変化しているものもあり、どのような要因で変化が起こるのか明らかではないが、Воронцова (1979: 54) は使用

頻度の低い語や書物でのみ使用されるような語は語尾固定アクセントを保ち、使用頻度の高い語は19世紀末から20世紀初頭にかけてBA型に移ったという見方を示したうえで、BA型がさらに拡大するという予測を述べている。

一方、派生語の一部にもBA型への変化が見られる。形容詞語根に名詞化する屈折接尾辞 *-от-, -ин-, -изн-* を付加してできた名詞（例えば *выс-от-а* 「高さ」、*сир-от-а* 「孤児」など）は、18世紀から19世紀には複数形全体で語尾にストレスを持っていたが、19世紀の後半の詩に、複数形で語幹にアクセントを置く個別的な例が現れる。さらに、複数形が用いられるようになった時期が遅い語（例えば *долг-от-'а*（単数主格形）、*долг-'от-ы*（複数主格形）「長さ」など）は安定したBA型をとるという（Воронцова (1979: 55-57)）。

### 3. 現代の辞書における旧移動アクセント型および旧語尾固定アクセント型の変遷

本節では、第2節で扱った(4)、(5)の語彙のアクセントが現代の辞書類においてどのように記述されているかを見ることにより、BA型への変化がさらに進んでいるのか否か、あるいはこれ以外の変化が生じているのかを見ていく。ただし、リスト内の語彙のうち、移動アクセント型の *среда* は、参照した20世紀終盤以降の辞書に載っていないため、扱わない。また、*черта* はВоронцова (1979) で移動アクセント型のリストにも語尾固定アクセント型のリストにも載っており、Востоков (1831) では既に移動型として扱われていないことから、ここでは語尾固定型として扱うことにする。

使用する辞書類のうち、Резниченко (2008?)<sup>2)</sup> とИванова (2004) は、アクセントのバリエーションに関して、ほとんどの場合にどのバリエーションがより規範的であるかという注記がなく、単にゆれとして並記している。その中で、前者の方が全体的により多くのバリエーションを認めているが、これはまさにアクセントを調べるための辞典であり、掲載されたうちの多くの項目においてパラダイム全体の語形とストレス位置やパラダイムのアクセント型名が示されている一方、掲載語数が少ないという難点がある。一方、Горбачевич (2004) は規範性において等価なゆれ (... и ...) だけでなく、より古い形式 (устарелое, устареваящее), より新しい形式 (допустимо, не рекомендуется), 正しくない形式 (неправильно), 特定の職業や専門分野の人の発話において用いられる形式など、様々なバリエーションのコメントが記載されている（詳しくは第4節を参照）。そして、これら3種の辞書における記述は、一致の様相が語によって異なり、それぞれにおいて規範とされるアクセントがゆれを含めて一致する語もあれば、3種の辞書がそれぞれ異なるアクセント型を提示する語もある。

また、これらの21世紀の辞書とВоронцова (1979) で扱われていた20世紀半ばまでの記述との間の時期として、20世紀の最後の4分の1の時期に発行された辞書 Розенталь, Теленкова (1976) およびБорунова и т. д. (1983) を参照する。この2種の辞書のうち、Воронцова (1979) の



リストの中では後者のほうがより掲載語が多い。

本節では、これらの21世紀初頭の3種、20世紀終盤の2種の辞書が、Воронцова (1979) が取り上げたУшаков編 (1934-40) の辞書<sup>3)</sup> と比べてどのようにアクセントを記述しているかを検討する。ただし、各辞書に掲載されていない語については必要のない限り言及しない。

なお、辞書類においてパラダイム全体のアクセントが示されていない場合、単数主格・生格・与格・対格・造格・前置格; 複数主格・生格・与格・造格・前置格の順に、前に記載された語形のストレス位置から類推するという前提がある。このため、例えば見出し語としての単数主格形と並んで複数主格形のストレス位置しか記載されていない場合は、単数形全体が単数主格形と、複数形全体が複数主格形と同じ位置にストレスを持つという意味になる。また、このことよりも優先される前提として、通常、第2変化名詞は所属するアクセント型にかかわらず、単数形のうち対格形以外はすべて同じ位置にストレスを持つ。このため、一般にこうした辞書類において、パラダイム全体のアクセントが示されていない場合は、この前提を念頭にパラダイム全体のアクセントを読み取る。したがって、例えば単数主格形と単数対格形で異なるストレス位置が示され、単数生格形・与格形・造格形・前置格形の記載がない場合、生格形・与格形だけでなく、造格形・前置格形も主格形と同じ位置にストレスを持つものとみなす。

### 3.1. 旧移動アクセント型の記述

第2節で見たように、旧来の移動アクセント型(CC型)はУшаковの辞書において既に変化を始めていた。対象となる58語中、意味の区分に伴ってアクセントが異なる語を重複して数えると、規範的な形がCC型を保っていたものが7語あったが、既にBA型とされたもの(22語)、CC型からBA型への変化の過程とみられるBC型とされたもの(10語)、同じくCA型(3語)、CC型~BC型のゆれ(5語)、BC型~BA型のゆれ(1語)、CC型~CA型のゆれ(2語)、CA型~BA型のゆれ(4語)、CC型~BA型のゆれ(3語)があった。このほか、BB型とみられる語が1語と単数形のみが明示される語が4語ある。以下では現代の辞書における記述と比較する。

#### 3.1.1. 20世紀前半のアクセント型の記述からの変化

Ушаковの辞書においてCC型のみが規範とされていた7語のうち、*сторона* など5語はИванова (2004) においてのみBC型とされるが、他の現代の辞書ではCC型を保っている。*доска* は辞書によりCC型、単数でBとなる型、複数でAとなる型が入り混じっているが、Горбачевич (2004) では単数でBとなる型、複数でAとなる型が新しいと考えられる«допустимо»「許容される」の注記を伴う。2つの意味を持つ*кроха* の変化は珍しく、「破片」の意味でРозенталь, Теленкова (1976) はCC型のままとするが、Борунова и т. д. (1983), Резниченко (2008?),

Иванова (2004) はAA型とし、前2者はさらに旧型としてBB型を挙げる。「幼児」の意味では、記載のある辞書すべてにおいてAA型となっている。

Ушаковの辞書において既にVA型とされた語は、20世紀終盤以降の辞書では*цена*と*межа*を除いて規範としてVA型を示す(*семья*など20語)が、そのうち「暁」の意味での*заря*はBC型とVA型が併記されるか、BC型が旧式とされる。例外的に*цена*はРозенталь, Теленкова (1976), Горбачевич (2004), Резниченко (2008?)においてCA型とされ、VA型としているのはИванова (2004)のみである。また、Борунова и т. д. (1983)は変則的なアクセント型を記している。一方、*межа*はБорунова и т. д. (1983), Резниченко (2008?), Иванова (2004)においてBB型とVA型が併記され、Розенталь, Теленкова (1976)ではBC型とされる。Горбачевич (2004)は規範をBB型とし、「допустимо」としてVA型、旧式として単数形でのC型を挙げている。これらの辞書において、*межа*の複数生格形として屈折語尾 *-ей*を持つ形とゼロ語尾をとる形が挙げられ、前者では語尾にストレスを置き(меж-'ей)、後者では語幹にストレスを置く('меж-0)とされている。このように、*межа*はストレス位置だけでなく屈折語尾にもゆれがあるという点でも、他の多くの語とは異なっている。

Ушаковの辞書においてVA型を含むゆれ(BC型～VA型, CA型～VA型, CC型～VA型)を示すとされた語は、20世紀終盤以降の辞書では多くの場合(8語中6語)VA型が規範となっている。ただし、Ушаковの辞書でCA型～VA型とされた*изба*は、現代の各辞書においてもCA型とVA型が併記されるか、VA型が規範でCA型が旧式とされる。また、CC型～VA型とされた*зима*は現代の辞書でCA型とされている。

Ушаковの辞書において変化途上のBC型とされていた語は10語であり、そのうち*ноздря*, *пята*, *слеза*の3語は掲載する現代の辞書でもBC型とされる。また、他の4語(*блоха*, 「波」の意での*волна*, 「畝」の意での*гряда*, *железа*)は現代の辞書ではBC型とVA型が併記されるか、そのどちらかの型を規範とされている。なお、*гряда*は「連丘」の意味では現代の辞書でBB型(ただしГорбачевич (2004)においては単数B型、複数で主格が語尾、斜格が語幹にストレスを持つ変則的な型)とされる。残る3語は*сковорода*と*гора*と*щека*であり、音節数の多い*сковорода*は現代の辞書においてバリエーションが多く、Горбачевич (2004)では規範形がCC型(他の辞書ではBC型)とされる。*гора*はИванова (2004)がBC型とする他はCC型とされている。*щека*は辞書によりCC型とBC型の両形を挙げるか、どちらかを規範としており、Горбачевич (2004)は規範としてCC型、旧式として単数形B型および複数形A型を挙げている。これら3語は全体の流れから逆戻りしているように見える。

Ушаковの辞書においてCC型～BC型のゆれを持つとされる5語のうち、*слобода*は現代の辞書においてBC型が規範とされ、さらにБорунова и т. д. (1983)とГорбачевич (2004)において«не рекомендуется»の注記を伴ってVA型が挙げられる。また、「指導者」の意味で用いられ

る場合の *голова* も意味の区分の記載がある辞書において BC 型とされる。*строка* は Розенталь, Теленкова (1976) のみにおいて VA 型を持つとされ、現代の他の 4 種の辞書が規範として挙げるのは BC 型である。*ворозда* と *полоса* は共に 2 音節語幹を持つが、CC 型または BC 型あるいはその両方が現代の辞書において規範とされ、辞書の年代とこの 2 つの型の間に相関関係は見られない。ただし、Горбачевич (2004) においては BC 型がより新しいとされる «допустимо» の注記を伴う。この 2 語について Борунова и т. д. (1983) と Розенталь, Теленкова (1976) はそれぞれ «не рекомендуется» 「薦められない」あるいは «неправильно» 「正しくない」の注記を添えて VA 型を挙げている。

Ушаков の辞書で CA 型とされる語のうち、*земля* は現代のすべての辞書で CA 型とされ、「軍の合図」の意味での *заря* は辞書により CA 型あるいは CC 型とされる。*коса* も「下げ髪」の意味では各辞書で CA 型が挙げられるとともに、Резниченко (2008?) と Иванова (2004) において規範的なゆれとして、Борунова и т. д. (1983) と Горбачевич (2004) において «допустимо» として VA 型が挙げられる（「大鎌」の意味での変化は 3.2 節参照）。

Ушаков の辞書で CC 型～CA 型のゆれを示すものとされるのは、*вода, душа* の 2 語であり、現代の辞書では共に規範が CA 型とされる。

一方、CC 型から VA 型への変化の流れから逸脱する型は、これまで見てきた例を除けば、*кума* のみである。これは Ушаков の辞書では単数形のみ B 型が示され BB 型と考えられるが、Борунова и т. д. (1983) で BC 型とされ、21 世紀の辞書では BB 型となっている。なお、Ушаков の辞書で複数形が明示されていない他の 3 語は、現代の辞書でも複数形のアクセントが明示的でないため、ここでは取り上げない。

### 3.1.2. 旧移動アクセント型の変化のまとめと分析

前節での観察から、意味の区分に伴って異なるアクセント型を持つものやいくつかの例外的な語を除けば、やはり全体として VA 型への変化が起きており、この変化の流れから逸脱する場合、論理的には可能であっても語例の少ない AC 型や CB 型といった型ではなく、数の多い AA 型もしくは BB 型に変化しているということがわかる。

この変化の流れの中で、複数形のアクセントと語幹の音節数に着目してみると、単音節語幹・多音節語幹の複数形のアクセント型は、(6) のようになっている。この表では、複数形の規範とされるアクセント型について「A 型のみ:A 型および C 型:C 型のみ」の語数を示している。各時代の辞書に大差はなく、20 世紀からの変化は認められない。しかし、a 列と b 列を比較すると、単音節語幹と多音節語幹では C 型から A 型への移行に顕著な相違があることがわかる。

(6)

	a. 単音節語幹	b. 多音節語幹	c. 出没母音を伴う語幹
Ушаковの辞書	23: 5:13	0:0:9	6:1:1
Борунова и т. д. (1983)	28:2:8	0:0:8	7:1:0
Горбачевич (2004)	25:2:6	0:0:8	7:1:0

このことには、次のような理由があると考えられる。すなわち、旧C型の単音節語幹においては複数主格形と複数生格形が同じ音節（すなわち、唯一の語幹音節）にストレスを持つことから、複数形パラダイム内で語幹に同じアクセントを持つ形の使用頻度が増大し、それが類推によって斜格に拡大することで、まず単音節語幹語において複数形でのA型が広まった可能性がある。多音節語幹語の場合は、元来は複数主格形と生格形のストレス位置が異なるため、類推のモデルとして機能しにくく、C型からA型に移行するには単音節語幹の場合よりも障壁が高いことになる。

それでも一部の多音節語幹語には、複数形全体が語幹にストレスを持つようになるにつれて、語幹の中でも同じ音節にストレスを持つようになるという傾向が見られる。例えば、*полоса* はどの辞書においても規範的には複数形でC型をとり、'полос-ы, по'лос-∅, полос-'ам, полос-'ами, (о) подос-'ах とされるが、Розенталь, Теленкова (1976), Борунова и т. д. (1983), Горбачевич (2004) は «не рекомендуется» の注記を添えて複数形がすべて主格形と同じ語頭音節にストレスを持つ形 ('полос-∅, 'полос-ам, ...) を掲載している。

ただし、語幹末に出没母音を持つ語 ((6) のc列) の場合は事情が異なる。データに含まれる8語はすべて、複数生格形以外では単音節語幹だが、屈折語尾がゼロとなる複数生格形のみで語幹末に母音が現れ、複数音節語幹となる（例えば、*овца* は複数主格形 *овц-ы* に対し、複数生格形 *овец-∅*）。この複数生格形が仮アクセントを持つとすると、語幹末に現れた母音を含む音節にストレスが置かれる (о'вец-∅) ため、語頭音節にストレスを持つ複数主格形 ('овц-ы) とはストレス位置が異なる。しかし、この複数生格形のストレス位置を、主格と同じ語頭音節とする語も存在する。

語幹アクセントは複数斜格形にも拡大し、現在、出没母音を持つ語で複数形全体が語幹にストレスを持つA型は7語ある。現代の辞書では、これらの語のうち、4語は複数生格形において語幹末にストレスを持ち、語幹の中でも主格形とはストレス位置がずれる（例えば、*овца* は複数で 'овц-ы, о'вец-∅... となる）が、残る3語は主格と同じ語頭にストレスを持つ（例えば、*весна* は複数で 'вёсн-ы, 'вёсен-∅... となる）。複数生格形が語頭にストレスを持つ3語 (*весна* の他、*десна* と *метла*) は、この語頭音節の母音 e /e/ がストレスを持つのに伴って ë /o/ になるという共通点がある。これにより、ストレス位置だけでなく、母音の音価の面でも複数形内部での均一性と単数形との差異が保証される。

一方、現在、出沒母音を持つ語でゆれを含めて複数形でC型を保っていると思われるのは *доска* のみである。この語の複数形は 'доск-и, досок-Ø, доск-ам, доск-ами, доск-ах' であるが、参照した辞書においてストレス位置が一致するのは語頭にストレスを持つ主格形のみであり、複数A型と複数C型の記述が混在する。その中で、複数生格形では出沒母音 *o* が語幹末に現れるが、元来のC型の仮アクセントと同じ *до'сок-Ø* とするバリエーションと、A型のように複数主格形のストレス位置と一致させて *'досок-Ø* とするバリエーションがある。Иванова (2004) は *до'сок-Ø* のみを挙げ、Резниченко (2008?) は *до'сок-Ø* と *'досок-Ø* を併記するが、Борунова и т. д. (1983) および Горбачевич (2004) は *до'сок-Ø* を規範として *'досок-Ø* に «допустимо» の注記を付けている。

### 3.2. 旧語尾固定アクセント型の記述

次に、Воронцова (1979) において語尾固定アクセントのリストに挙げられた語の現代における様相を見る。結論から言えば、語尾固定型すなわちBB型も、BA型に変化しつつある。このタイプの変化は単数形の変化を必要としないので、以下ではУшаковの辞書における複数形の記述のタイプ毎に整理する。

まず、Ушаковの辞書において既に、BB型にとどまっている語はわずかに *черта* 1語になっていた。この *черта* は現代の辞書においてもBB型とされる。

Ушаковの辞書において複数形がB型の記述を含む語は他に、V型～A型のゆれとされるものが2語 (*тропа, струя*)、V型～C型のゆれとされるものが1語 (*стопа*)、V型を旧式としてC型を規範とする語が2語 (*скала, судья*)、V型を旧式としてC型～A型のゆれとされる語が1語 (*толпа*) あった。このうち、V型～A型とされた *тропа* は Розенталь, Теленкова (1976) と Иванова (2004) においてBC型とBA型の間でゆれを持つとされ、Борунова и т. д. (1983)、Горбачевич (2004)、Резниченко (2008?) においてBA型とされている。また、同じく *струя* は Иванова (2004) においてBB型とされているが、他の辞書ではBA型とされ、V型～C型とされた *стопа* は現代のすべての辞書でBB型とされている。V型が旧式とされていた *скала, судья, толпа* は、掲載するすべての現代の辞書で規範がBA型とされる。

また、Ушаковの辞書において複数形がC型となっていた3語 (*свеча, скорлупа, щепя*)、C型が旧式、A型が規範とされた2語 (*жена, сестра*)、C型～A型のゆれを示すとされた3語 (*дуга, река, судьба*) のうち、*свеча, щепя, река* 以外は現代の辞書ですべてBA型となっている。*свеча* は現代の辞書でBC型、*щепя* はBB型～BA型のゆれもしくはBC型とされ、BA型への変化の流れの中にあると言える。*река* については後述するように、特異な変化を見せている。

Ушаковの辞書において複数形がA型に至っていたものは19語 (*беда, вдова, вина, война, дыра, змея, игра, коса* 「大鎌」、*лиса, лука, пила, скула, слуга, сова, стрекоза, трава, труба, тюрьма,*

узда) あったが、このうち *коса* は Иванова (2004) で BA 型、他で CA 型と BA 型が併記され、他の語は現代の辞書ですべて BA 型とされる。

以上の観察の中で、数語を除いて BA 型への流れの中にあり、ほとんどが BA 型に到達していることがわかる。一方、BA 型への流れに抗しているのは *стопа* と *черга* (共に現代も BB 型) の2語と *река* である。*река* は Ушаков の辞書で CC 型～CA 型のゆれとされ、現代の辞書では単数形で B 型と C 型、複数形で A 型と C 型が挙げられており、まるで CC 型から BA 型への変化があるかのように見える。

この *река* については、単数形で C 型への寄り道をしているように見える点が特異的であるが、Воронцова (1979: 59f) によれば、18 世紀の詩ではすべての例で語尾にストレスが置かれていたのに対し、19 世紀前半には語幹に置く例が現れ、20 世紀初頭では例のうち語幹に置く例と語尾に置く例が同数になるという。旧語尾固定アクセント型の語で単数対格形のストレスが語幹に置かれるこの現象は、特に *река* で広まって現在に至るが、18 世紀から 20 世紀初頭の詩による例証では、他の語においても個別に観察されるという。Воронцова (1979) は旧語尾固定アクセント型の語で単数対格形のストレスが語幹に置かれるこの現象を類推によるとしているが、旧来の移動アクセント型の語も多くが BA 型になる中で、本来の型の区別が希薄になって混交したものと考えられる。

なお、前節で見た仮アクセントの語幹固定アクセント化は、旧語尾固定アクセント型の語においても少数ながら観察される。出沒母音を持つ語は *сестра*, *судьба*, *судья*, *тюрьма* の4語だが、*сестра* は一貫して複数生格形で出沒母音を含む語幹末音節にストレスを持ち、他の格とはストレス位置が異なる ('сёстр-ы, се'стёр-θ, 'сёстр-ам ...)。*судья* は現代の辞書において複数生格が 'судей-θ と су'дей-θ が併記されるが、Горбачевич (2004) は 'судей-θ に «допустимо» の注記を付けて新しいバリエーションとしている。*тюрьма* は Борунова и т. д. (1983), Горбачевич (2004), Иванова (2004) において複数生格形 'тюрем-θ であり、複数主格形と同じ位置にストレスを持つようになっているが、Горбачевич (2004) はこれと並んで旧式の тю'рем-θ を挙げている。残る *судьба* は、現代の辞書がすべて複数生格形 'судеб-θ を規範として挙げ、さらに Борунова и т. д. (1983), Горбачевич (2004), Иванова (2004) は旧形として、Розенталь, Теленкова (1976) はゆれとして су'деб-θ を挙げている。新しい BA 型では、複数主格形だけでなく斜格形も語幹の同じ音節にストレスを持つため、仮アクセントの位置では *сестра* のように生格形のみが異なる位置にストレスを持つことになるが、他の3語では複数形全体が同じ位置にストレスを持つ方向に変化しつつある様子が観察される。

#### 4. 現代の辞書に見られるアクセントのゆれ

本節では、現代の辞書のうち、アクセントに関する注記が豊富な Горбачевич (2004) をデー

タとして、前節までに見てきた Воронцова (1979) が選定した語彙からさらに対象を広げて、現代のアクセントの記述を調べることにする。Горбачевич (2004) はロシア語で記述されており、使用者として母語話者を念頭に置いているものと思われるが、話者にとって難しいと思われる項目を集めて掲載している。難しいと感じられるということは、そこにゆれや文体差、変化の兆しなどが潜んでいると考えられる。逆に言えば、通常の辞書とは異なり、語彙をまんべんなく集めたわけではないため、ここで集められた語彙の数が全体の傾向を反映するとは言えないことに注意が必要である。これはあくまで、ゆれや変化の兆しがどのような語彙にどのように認められるかを見出すための作業である。

Горбачевич (2004) における注記のうち、「и」「ならびに」で結ばれる形は許容度が同等であることを示し、規範性の高いゆれであると言える。また、巻頭の記述によれば、「допустимо」「許容される」は許容される形のうち新しい形、「не рекомендуется」「薦められない」は観察されるものの現在薦められる形ではないが、今後の変化により認められる可能性があるとするものであり、共に新しい形の範疇に入る可能性のあるものである。一方、「устарелое」「廃れた」および «устаревающее» 「廃れつつある」は古い形とみなすことができる。他に、「неправильно」「正しくない」の注記も頻出するが、これは変化の方向性が明らかではないので、以下の観察では重視しない。以下では、見出しとして最初に挙げられている形を規範形とし、その他をバリエーションと呼ぶ。また、代表形式としてのイタリック体での表記にストレス記号を付したものは、固定アクセントの規範形を示すものとする。

Горбачевич (2004) はアクセントだけでなく文法事項（複数生格の語形など）やアクセント以外の正音法（文字 e をストレスがある場合に /j)e/ と /j)o/ のどちらで発音するか、あるいは文字 e が示す母音の先行子音を硬口蓋化するか否かなど）に関する記述のための項目も多いが、その中で、アクセントについての記述が載っているものを抽出した。見出し語はどの項目もストレス記号が付与されているが、その中で文法事項等でなくアクセントを記述するための項目であると判断する基準は、アクセントのバリエーションが記載され、その妥当性や使用範囲の限定などの注記があるか、1種類のアクセントしか示されていない場合には単数形と複数形の両方（単複両法が用いられる語の場合）の少なくとも主格が示されていることとした。また、単数主格形に加えて複数生格形のみが記載されている場合でも、この2つの形でストレスの位置が異なる場合は取り上げることにした。

対象となる語は488語あり、その中には特定の派生接尾辞を持つ語が多く含まれるほか、派生接頭辞を持つ語や複合語も若干含まれる。また、ロシア語文化圏以外の地域の社会に関する語彙など、使用頻度が低いと考えられる語彙も少なくない。

#### 4.1. 派生接尾辞を持つ語のアクセント

ここでは、固有語と借用語を区別せず、特定の派生接尾辞を持つ語を取り上げる。派生接尾辞により語のアクセント型の分布がかなり規定されることが明らかになっているためである(Суперанская (1968), Редькин (1971) 等)。ここで扱う接尾辞は、後続する屈折接尾辞 /-a/ も含めた語尾を示せば、-ия, -ица, -иха, -ша, -ыня/-иня, -ища, -ога, -ина, -ня, -ка, -ишка, -ья, -ба, である。これらが接尾辞として含まれるか、それとも語根の一部あるいは他の接尾辞の一部として含まれるかについては、Кузнецова, Ефремова (1986) の形態素辞典によって分け、この辞典によって独立した形態素でないことが明らかになったものは各項目の語数から除外した。この形態系辞典に掲載されていないものは、語尾-ияを持つものは借用語が多いため多数を占めるが、その他の語尾では合計22語と少数である。

なお、集めたデータには上述のもの以外の派生接尾辞を持つ語も含まれているが、例が少なく個別的であるため、(7)に挙げるにとどめる。

(7) 語幹末固定アクセント: ворож-е-я「女占い師」, вь-юг-а「吹雪」, зл-об-а「敵意」, волос-инк-а「毛1本」

語幹次末固定アクセント: доч-ушк-а「娘(指小)」(語幹末固定アクセントとの間でゆれ)

語尾固定アクセント: княж-н-а「公爵令嬢」, дет-в-а「蜂の子」, пред-плюс-н-а「足根(解剖)」

##### 4.1.1. 語尾 -ия を持つ語

語尾 -ия を持つ語は、идиосинкра'зия「特異体質」, колори'метрия「比色測定法」などギリシア語等ヨーロッパの言語からの借用語で、医学や物理学などの専門的な用語が多く含まれる。また、複合的な語基を持ち音節数の多いものが多い。当該のデータの中で、規範的な形が語尾 -ия /-ij-/ を持つ語は90語あり、1語を除き、語幹固定アクセントである。語幹固定アクセントの89語は、規範形で語幹末音節(すなわち接尾辞 /-ij/ を含む音節)あるいはその直前の音節(語幹次末音節)のいずれかにストレスを持ち、規範形以外に1つのストレス位置のバリエーションが見られるが、その許容度に関する注記は様々である。そしてこのバリエーションの位置も、ほとんどが語幹末音節または語幹次末音節である。

規範形とバリエーションの分布を、注記の種類ごとに表に示す。表では、ストレスの位置を語幹末からの位置でローマ数字(語尾固定アクセントはBB)によって示し、語数をアラビア数字で示す。なお、括弧内はストレス位置が語頭に一致する語数の内数(すなわち、ここでは規範形で語幹次末音節(II)にストレスを持つ60語のうち4語が2音節語幹語)である。



規範形	и	допус- тимо	не рекомен- дуется	непра- вильно	устарелое	устаре- вающее	特定の 話者
I-29	II-1 BB-1	II-2	II-1	II-8	II-15	II-1	
II-60 (4)	I-11 III-3	I-5	I-12	I-9 BB-1	I-6 BB-1		I-14
BB-1							

注記のうち、「и」で結ばれて語幹末音節と語幹次末音節が同等の許容度を持つとされる語は、合わせて12語である。また、「допустимо」、「не рекомендуется」の注記を持ち、新しい形と考えられるものが語幹末音節（I）にストレスを持つ場合（計17語）が、その逆（II）（計3語）に比べて多いと言える。一方、規範形が語幹次末音節にストレスを持ち、「устарелое」および「устаревающее」の古い形が語幹末音節（I）にストレスを持つ語（6語）は、その逆（II）（計16語）に比べて少ない。ここから、この語尾を持つ語にはゆれやバリエーションが見られる語が数多く存在する中で、全体としては、語幹次末音節から語幹末音節にストレスを移しつつある傾向があると考えられる。

また、この表から、規範形が語幹次末音節にストレスを持つ語の中で、「特定の話者」が語幹末音節にストレスを持つ場合が少なくない（I-14）ことがわかる。ここで「特定の話者」としたのは、「в речи медиков」「医療者の発話において」、「в профессиональной речи」「職業上の発話において」等の注記を持つものであり、こうしたいわゆる専門家アクセントとしては、語幹末音節にストレスが置かれていると言える。

なお、90語のうちで規範形が語幹固定アクセント以外の唯一の例は、語尾固定アクセントの *лития* 「死者のための短い祈禱」である。これは宗教関係の語であるが、他にも、*паремия* 「聖書からの格言」が規範形として語幹末にストレスを持つ他に、「и」で結ばれるゆれとして *паремья* が語尾固定アクセントを示す。また、ここで扱った90語には含まれないが、*епитимья* 「教会の懲罰」、*сктенья* 「死者への連禱」の2語も規範形で語尾にストレスを持ち、「устарелое」として語幹次末音節にストレスを持つ *епитимия*、*сктения* の形が挙げられている。語尾にストレスを持つこれらの語彙は共通して正教に関係する語彙であり、一種の語種のようなものがアクセントに関与している可能性がある。

一方、語幹固定アクセントを持つ89語は、医学・物理学・社会制度・技術などの分野の語彙を含むが、その分野と語幹末か語幹次末かというストレス位置の分布に関連は見られない。しかし、Горбачевич (2004) に記載されているもの以外の語彙を含めた分析によって何らかの傾向が見られる可能性や、使用頻度が関与している可能性は残されている。

4.1.2. 語尾 *-ица* を持つ語

語尾 *-ица* を持つ語はデータの中に22語認められる。すべて語幹固定アクセントであり、それぞれの語が規範形のほかに1つのバリエーションを示す。女性を表す語彙のほか、動植物や人工物の名称等が含まれる。

規範形のストレス位置は語幹末音節（すなわち屈折接尾辞 */-ic/* を含む音節）9語（例、*баловн'ица* 「いたずら娘」）、語幹次末音節7語（例、*верс'теница* 「アシナシトカゲ」；うち *'ровница* 「粗紡糸」など3語は2音節語幹のため語幹次末音節が語頭に一致する）、語幹前次末音節6語（*дьяволица* 「鬼のような女」など、すべて3音節語幹のため前次末音節が語頭に一致する）となっている。それぞれのバリエーションの語数を次の表に示す。

規範形	и	допус- тимо	не рекомен- дуется	непра- вильно	устарелое	устаре- вающее	その他
I-9	II-1(1)		II-1	II-1(1) III-1(1)	II-3(2) IV-1(1)		II-1(1)
II-7 (3)	I-4		I-1	I-2			
III-6 (6)	I-1 II-1	I-2 II-2	II-1	II-1			

語尾 *-ица* は、Редькин (1971) によれば、語幹固定アクセント語根に付く場合はその語根のアクセントを変えず、語尾固定または移動アクセント語根に付く場合はこの派生接尾辞 */-ic/* を含む語幹末音節がストレスを持つというタイプである。この指摘と、語幹末音節がストレスを持つ語 (I) と語根の音節にストレスを持つ語 (II, III) が存在することとは矛盾しない。ここではそれぞれの語根がどのタイプであったかは考慮に入れていないが、Горбачевич (2004) の注記から考えられる変化の方向は、語幹末以外の音節から語幹末へというものが多くある。

一方、データの語の中に、末尾に *-ица* の音形を含みながらより音素数の多い語尾 *-ница*、(*звонница* 「鐘楼」1語)、*-щица* (*формовщица* 「鋳型工の女性」等5語)、*-льщица* (*чистильщица* 「清掃係の女性」等2語) を持つ語があるが、このうち *-ница*、*-щица* は Редькин (1971) によって語尾 *-ица* と同じふるまいをするものとされている。Горбачевич (2004) の記述では、規範形で屈折語尾 (I) にストレスが置かれる例はなく、II、あるいは III となっており、バリエーションには I もあるが、変化に一定の方向性は見出せない。語尾 *-льщица* は、Редькин (1971) によれば、語幹固定アクセント語根に付く場合はその語根のアクセントを変えず、語尾固定または移動アクセント語根に付く場合はこの語尾の直前にストレスを置くというタイプであるが、こちらもデータでは II、あるいは III となっており、矛盾しない。

4.1.3. 語尾 *-иха* を持つ語

語尾 *-иха* を持つ語は、女性（例、*щего'лиха* 「おしゃれた女性」）あるいは雌の動物（例、

*каба'ниха* 「雌猪」) を指す名詞であり、データとなるのは4語である。すべて語幹固定アクセントを持ち、規範形は語幹末あるいは語幹次末音節にストレスを持つ。バリエーションは各語1つずつ挙げられており、表に示すとおりである。

規範形	и	допус- тимо	не рекомен- дуется	непра- вильно	устарелое	устаре- вающее	その他
I-2				II-1 III-1(1)			
II-2		I-1		I-1			

この語尾も、Редькин (1971) によって語尾-ицаと同じふるまいをする(すなわち、語根音節あるいは接尾辞/-ix/を含む音節がストレスを担う)ものとされており、IとIIにストレスを持つ語があることに変化の兆しは見られない。

#### 4.1.4. 語尾-шаを持つ語

語尾-шаは女性を示す名詞を作る。ここに該当するのは*кио'скёрша* 「キオスクの女性店員」など3語であり、すべて語幹固定アクセントを持つ。

規範形	и	допус- тимо	не рекомен- дуется	непра- вильно	устарелое	устаре- вающее	その他
I-2				II-1		II-1(1)	
II-1(1)		I-1					

この語尾は、Редькин (1971) によって語尾-льщицаと同じふるまいをし、語根音節がストレスを持つものとされている。このことからすると、IまたはIIにストレスを持つのは予測どおりである。その中で、例が少ないため断言はできないものの、注記からはII > Iの変化が推測される。

#### 4.1.5. 語尾-ыня / -иняを持つ語

語尾-ыня / -иняは、女性を示す場合(例、*инокиня* 「修道尼」)と形容詞から名詞を作る場合(例、*пустыня* 「砂漠」)がある。該当するデータは5語あり、そのうち1語は移動アクセントを示す。4語は語幹固定アクセントであり、その内訳は表のとおりである。規範形が語幹末にストレスを持つ3語のうちの2語は、バリエーションが示されていない。

規範形	и	допус- тимо	не рекомен- дуется	непра- вильно	устарелое	устаре- вающее	その他
I-3			III-1(1)				
III-1(1)		I-1		I-1			

移動アクセントを示す*простыня* 「シーツ」は、単数形で屈折語尾(語頭は«не рекомендуется»), 複数主格形で語頭音節にストレスを持ち、複数生格形は*про'стынь и просты'ней*と

2通りに記載されている。複数斜格のストレス位置は明示されていないが、BC型もしくはBA型と見られる。

Редькин (1971)によれば、この語尾を持つ語は語根のタイプにかかわらずこの派生接尾辞を含む音節 (I)がストレスを持つとされる。このデータでは5語中3語がРедькин (1971)の記述どおり規範形でIとなっているが、変化の方向は不明である。

#### 4.1.6. 語尾 -ища を持つ語

語尾 -ища を持つ語はデータの中に5語あり、うち4語 (*губища* 「唇」など)は指大語であり、1語は罵倒語の *дурница* 「馬鹿女」である。このうち指大語の *дырница* 「穴」は語幹末にストレスを持つ規範形のみ記載であり、他4語はバリエーションを1つずつ持つが、すべて語幹固定アクセントである。

規範形	и	допус- тимо	не рекомен- дуется	непра- вильно	устарелое	устаре- вающее	その他
I-2						II-1(1)	
II-3(3)	I-1		I-2				

この語尾は、Редькин (1971)によって語尾 -ища と同じふるまいをするものとされており、語根のタイプによって語幹末あるいはそれより左の音節にストレスが置かれることが予測されるが、Горбачевич (2004)の注記からは、語幹末音節への変化の可能性が推測される。

#### 4.1.7. 語尾 -ота を持つ語

語尾 -ота は形容詞等から主として抽象名詞を作っており、データでは18語が該当する。このうち *острота* は語幹固定アクセント (I)で「しゃれ」、単数形のみ語尾固定アクセント (表ではBBに算入)で「鋭さ」と意味が区分されるため、ここでは2語に分けて扱う。このように数えると計19語となり、そのうち9語が移動アクセントを示し、残る10語はバリエーションを含めて語幹末 (例、*щедрота* 「贈り物」)あるいは屈折語尾 (例、*пустота* 「空虚」)の固定アクセントを示す。固定アクセントを示す語およびBA型のバリエーションを表に示す。

規範形	и	допус- тимо	не рекомен- дуется	непра- вильно	устарелое	устаре- вающее	その他
I-5				BB-3			
BB-5				I-1	I-2		
BA-8				I-1			

移動アクセントを示す9語のうち、*высота* 「高さ」、*долгота* 「長さ」、*кислота* 「酸味」、*красота* 「美しさ」、*сирота* 「孤児」、*тошнота* 「吐き気」、*частота* 「頻度」、*широта* 「広さ」の8語は規範形がBA型であり、複数形では語幹末音節にストレスを持つ。ただし、*сирота* は複数形で語幹次

末音節（すなわち語頭音節）にストレスを持つ形が «неправильно» の注記を添えて挙げられ、*тошнога* は語幹末固定のAA型が «неправильно» の注記を添えて挙げられる。残る *тягота* 「つらさ」は特殊であり、規範形がCA型であるが、複数形では語幹次末音節にストレスを持つ。さらに、複数形のB型が «устарелое» の注記を添えて挙げられ、この場合は複数生格形が語幹末音節にストレスを持つ。また単数主格形も語頭音節にストレスを持つ形が «допустимо», B型が «не рекомендуется» の注記を持ち、バリエーションの記載が多様である。

Редькин (1971) では、この語尾は語根のアクセント型にかかわらず、動詞語根に付く場合はこの派生接尾辞を含む音節に、形容詞語根に付く場合には屈折語尾にストレスを置くとされる。ここでのデータでは、固定アクセントとしては語幹末すなわちこの派生接尾辞を含む音節にストレスを置く語と屈折語尾にストレスを置く語があり、この記述と一致する。また、形容詞語根から派生した抽象名詞について言えば、ほとんどBB型あるいはBA型になっていることから、BB型からBA型への変化が生じている可能性がある。

#### 4.1.8. 語尾-инаを持つ語

語尾-инаを持つ語は、*низи́на* 「低地」、*быстри́на* 「急流」など、形容詞等から派生した語である。データは8語ある。固定アクセントを示す6語と移動アクセントを示す2語を持つバリエーションを表に示す。

規範形	и	допустимо	не рекомендуется	неправильно	устарелое	устаревующее	その他
I-3				II-1 BB-1		II-1	
BB-3			I-1	I-2			
BA-2				I-1			

移動アクセントを示すのは *седина* 「白髪」と *старшина* 「曹長」の2語である。この2語はともに規範形がBA型で、複数形では語幹末にストレスを持つが、前者はAA型が «неправильно» の注記とともに挙げられている。

Редькин (1971) によれば、この語尾は語幹固定アクセント型の名詞語根あるいは形容詞語根に付くときは語根のアクセントを変えず、語尾固定または移動アクセント型の名詞語根あるいは形容詞語根に付くときはこの派生接尾辞 /-in/ を含む音節にストレスを置くが、接頭辞付きの動詞の語根に付くときは、語根のアクセント型にかかわらずこの接尾辞の直前にストレスを置くとされる。すなわち、どのタイプの語根であっても語幹のいずれかの音節にストレスを置くことになる。この記述からは、BB型やBA型が出現する理由が読み取れない。

また、音連鎖 /in/ を含むより長い派生接尾辞に、-щин (-чин) があり、これを持つ *братчина* 「組合」、*складчина* 「抛出金」、*обыденщина* 「日常事」がデータに含まれる。この3語はすべて、

規範形でIIの位置に固定したアクセントを示しており、バリエーションは前2者で«и»で並置されるIすなわち接尾辞を含む音節、後者で«допустимо»の注記を伴ってIIIの位置にあるとされる。この接尾辞を持つ語についても、Редькин (1971)は、語幹固定アクセント型の語根に付くときは語根のアクセントを変えず、語尾固定または移動アクセント型の語根に付く場合は接尾辞を含む音節にストレスがあるとする。このデータのアクセントは語根のアクセント型を問わなければ、バリエーションを含めてすべてРедькин (1971)の記述に矛盾しない。

#### 4.1.9. 語尾 -няを持つ語

語尾-няを持つ語はデータの中に21語あるが、そのうち*шестерня*は複数生格形と共に意味が分離 (*шестерн'-ей*「6頭立ての馬車」、*шестерён-0*「歯車」)してあり、これを分けて2語として扱うことにする。このデータには人を表す語や場所・道具を表す語が多く含まれる。この接尾辞がこれまでに見てきたものと異なるのは、出没母音を持つという点である。これにより、複数生格形において語幹音節が増え、ストレスの位置が問題となる。

全体で22語のうち、規範形が固定アクセントのものは21語あり、表に示すようなバリエーションを持つ。表を見ると、IとVV型が目立つ。ただし、規範形がVV型の6語のうちの*родня*「釣り合う人」は、複数形が用いられない。単複ともに語尾固定アクセントを持つ5語のうち4語 (*квашня*「パン種桶」、*лыжня*「スキーの跡」、*пешня*「突き棒」、*шестерня*「6頭立ての馬車」)は、規範形で複数生格の屈折語尾がゼロではなく -ейを取るため、仮アクセントとはならず、この語尾がストレスを持つ(残る1語*шестерня*「歯車」は複数生格の規範形において上述のとおり仮アクセントを示す(*шесте'рён-0*)が、*шестерн'-ей*の形も«неправильно»の注記とともに挙げられている)。このことが、これらの語がVA型に向かわず、語尾固定アクセントを保つ要因になっている可能性がある。

規範形	и	допустимо	не рекомендуется	неправильно	устарелое	устаревающее	その他
I-13(5)		VV-2	AC-2	VV-3	AC-2		
II-2(2)		I-1	AC-1				
VV-6				I-1(1)		I-2(2)	
AC-1			I-1				

移動アクセントが規範形もしくは«неправильно»以外の注記を持つバリエーションとされるものは6語あり、すべてがAA型とAC型のいずれかを規範形ないしバリエーションとする。そのうち*деревня*「村」は規範形がAC型であり、*таможня*「税関」などの5語は規範形がAA型である。注記から考えられる変化は、AA型からAC型への変化が3語、その逆も3語となっており、明確な方向性は見いだせない。

Редькин (1971)によれば、この屈折接尾辞が名詞語根に付く場合は接尾辞の直前の音節 (I)

に、動詞語根に付く場合は屈折語尾にストレスを置くという。Iにストレスを置く語とBB型の語が多いという点ではこの記述に適っていると言える。

#### 4.1.10. 語尾 -ка を持つ語

語尾 -ка もその直前に出沒母音を持つ。この接尾辞を持つ語はデータの中に23語見出される。*туфелька*「靴(指小)」などの指小語が多いが、*по́йма*「取り押さえること」などの動作を表す語や*гра́жданка*「女性市民」などの女性を表す語も含まれる。これらはすべて固定アクセントを示す。

規範形	и	допус- тимо	не рекомен- дуется	непра- вильно	устарелое	устаре- вающее	その他
I-13(2)	II-2(2)		II-4(3)	II-3(3)	III-1(1)	II-1(1)	
II-10(9)	I-3	I-3	I-1	I-1	I-1		

Редькин (1971)によれば、この屈折接尾辞は語尾 -льщица と同様に、語幹固定アクセント語根に付く場合は語根のアクセントを変えず、語尾固定あるいは移動アクセント語根に付く場合は接尾辞の直前の音節 (I) にストレスを置くものとされている。しかし実際には、移動アクセント語根に付いた語においても、IIの位置にストレスを置く記述が相当数観察される。そのような語の半数程度は、派生接尾辞が付かない場合の屈折語形において語根末尾 (I) の母音が出沒母音となる(例、'сосен-к-а「松(指小)」<単数主格形 сосн-'а, 'сосен-ŋ 複数生格形「松」)ことが影響していると考えられる。

#### 4.1.11. 語尾 -ишка を持つ語

語尾 -ишка は、語尾 -ка と同様に /k/ の直前に出沒母音を持つ。この語尾を持つ語はデータの中に5語あり、いずれも卑称語あるいは指小語である(例、мебе'лишка「家具(卑称)」)が、その中には男性を表す男性名詞 сол'датишка「兵士(指小)」なども含まれる。アクセントはすべて語幹固定であり、1つずつバリエーションが記載されている。

規範形	и	допус- тимо	не рекомен- дуется	непра- вильно	устарелое	устаре- вающее	その他
I-2	III-1(1)					III-1(1)	
II-3(1)	I-1	I-2					

この語尾は、Редькин (1971)によれば語尾 -ица と同じタイプであり、語根のタイプによって接尾辞を含む音節あるいはそれより左の音節にストレスが置かれることが予測されるが、このデータ上も接尾辞を含む音節Iあるいはその左にストレスが置かれ、予測どおりとなっている。このデータの範囲から変化の方向を論じることは難しい。

## 4.1.12. 語尾-ьяを持つ語

語尾-ьяを持つ語は語幹末に出没母音を持つことになるものであり、ここでは10語が該当する。

このうち3語 (*кутья* 「法事粥」、*польня* 「氷湖」、*скуфья* 「修道帽」) は語尾固定アクセントであり、バリエーションは記載されていない。また、*скамья* 「腰かけ」と *тулья* 「帽子の本体」も規範形で語尾固定アクセントを示すが、共に移動アクセントであるVA型のバリエーションがあり、「не рекомендуется」の注記が付けられている。

一方、*гостья* 「女性客」と *сватья* 「婿の母」は規範形がAA型 (I) とされ、前者はさらにAC型が「не рекомендуется」の注記を伴って挙げられている。後者は、複数生格の規範形は 'сватий-0' であり、「неправильно」の注記を伴って *свать-'ей* (ハイフンによる形態素区分は筆者による) が挙げられているが、これは屈折変化の誤用に対する警鐘であろう。

規範形	и	допус- тимо	не рекомен- дуется	непра- вильно	устарелое	устаре- вающее	その他
I-2(2)			AC-1				
BB-5			BA-2				
BA-3					CA-2		

残る3語は移動アクセント型であり、Воронцова (1979) が旧語尾固定アクセント型として挙げた *судья* 「裁定者」と旧来の移動アクセント型として挙げた *свинья* 「豚」および *семья* 「家族」はいずれも規範形がVA型となっている。また、*свинья* と *семья* はCA型が「устарелое」の注記を持つ。

ここに属する10語の複数生格形は、特殊な形を持つ上記の 'сватий-0 を除き、規範形で語幹末の出没母音を含む音節にストレスが置かれる (ただし、*польня* は出没母音の前の音節にストレスを置く形 (по'льней-0) が「неправильно」の注記とともに挙げられ、*судья* は出没母音の前の音節にストレスを持つ形 ('судей-0) が「и」で併記される)。

Редькин (1971) はこの接尾辞を、語根のタイプにかかわらず接尾辞の直前にストレスを置くものとしているが、データでこれに合致するのはIにストレスを置く2語 (*гостья* および *сватья*) のみである。Редькин (1971) はこの2語以外を非派生語とみなしており、本稿で参照している Кузнецова, Ефремова (1986) の形態素辞典とは解釈が異なっている。このように語末が同形でも形態論的解釈が一樣でなく、アクセントが異なる語彙があることが Горбачевич (2004) の辞書に掲載される所以なのかもしれない。また、変化の方向性も明らかではない。

## 4.1.13. 語尾-баを持つ語

語尾-баはその直前に出没母音を持つが、Горбачевич (2004) には *моль'ба* 「懇願」と



*похваль'ба* 「自画自賛」の2語は複数生格が用いられないとの記載があり、そのため、ここに母音が出現する形は載っていない。この語尾を持つ語は8語あり、*резь'ба* 「切断」など動詞的な意味を持つものが多い。このうち、規範形で2語、バリエーションを含めると3語が移動アクセントを示し、上記の複数生格形が用いられない2語を含めた5語が規範形として語尾固定アクセントを示す。語尾固定アクセントを示す語のうち3語がバリエーションを持ち、そのうち*тагь'ба* 「窃盗」はBA型をバリエーションとし、複数生格形は仮アクセントのга'теб-θと'татеб-θが«и»で併記される。また、*тяж'ба* 「係争」の1語は語幹固定アクセントとされる。

規範形	и	допус- тимо	не рекомен- дуется	непра- вильно	устарелое	устаре- вающее	その他
I-1(1)				BA-1			
BB-5				I-2	I-1		
BA-2				BC-1	BB-1		

一方、移動アクセントを示すのは*стрельба* 「射撃」、*судьба* 「運」の2語である。このうち*судьба* は、Воронцова (1979) が挙げた旧語尾固定アクセント型のリストに入っており、現代では規範がBA型（複数生格形は他の格と同じ位置にストレスを持つ'судеб-θ）である。また、複数形での語尾固定アクセントが«устарелое»の注記を持ち、この旧式のアクセントでは複数生格形で出沒母音にストレスを持つ(су'деб-θ)。さらに単数形C型が«неправильно»の注記とともに挙げられているが、この点は上の表に反映されていない。また、*стрельба* も規範はBA型となっており、BC型が«неправильно»の注記を持つが、この語は複数生格においてゼロ語尾を取りながら出沒母音が出現しない(стрельб-θ)。

Редькин (1971) によれば、この語尾は語根のタイプにかかわらず屈折語尾にストレスを置く。ここでのデータでも固定アクセント型の多くがこの記述と一致し、また、旧来の非派生語の語尾固定アクセント型と同様に、BA型への変化が生じている可能性がある。

#### 4.2 派生接尾辞を持たない語のアクセント変化

Горбачевич (2004) から抽出した語の中で、派生接尾辞を持たない語のうち、ここではКрысин (2008) 等の借用語辞典によって借用語と確認された語を除いて変化の様子を見る。借用語のアクセントについてはСуперанская (1968) 等の先行研究があり、これとデフォルトアクセントとのかかわりについては安藤 (2010) で論じられているが、Горбачевич (2004) に記載されている借用語のアクセントについては、他の屈折タイプの名詞と併せて稿を改めたい。

ここで扱うのは、複合語、単純語、派生接頭辞を持つ語であるが、このうちでも、第3節で扱った旧移動アクセント型および旧語尾固定アクセント型の所属語を除いたものを取り上げる。

#### 4.2.1. 複合語のアクセント

まず、データの中に2語見出される複合語について整理する。

1語は、*угледобыча*「採炭」であり、規範形は語幹末に固定アクセントを持ち、鉱山労働者の発話に現れるバリエーションとして語幹次末音節に固定アクセントを持つ形が挙げられている。もう1語は*лесополоса*「植林帯」であり、これは単数形のみしか記載されていないが、規範形の主格形で屈折語尾、対格形で語幹次末音節にストレスを持つ移動アクセントとされる(«допустимо»の注記を伴って、単数形で語尾固定アクセントも挙げられている)。これらの形は、前者の規範形とバリエーションおよび後者の規範形が、複合語幹の後部要素が単純語として用いられる場合(*добыча*「採取」および*полоса*「地帯、縞」)と同じアクセントを持つものとして記述されている。

#### 4.2.2 単純語のアクセント

ここで単純語として扱うデータは65語ある。規範形で固定アクセントを持つ語は'*свёкла*「ビーツ」、*шляя*「馬の尻帯」など43語あり、バリエーションは表のとおりである。

規範形	и	допустимо	не рекомендуется	неправильно	устарелое	устаревающее	その他
I-20(13)		BB-2	BB-3	II-1(1) BB-7		BB-1	
II-2(2)				I-1			
III-1(1)				I-1			
BB-20			I-1(1)	I-4(4)	I-4(3)	I-2(1)	

固定アクセントの例からは、IとBBの位置の間で変化やゆれが生じているものが目立つが、明確な変化の方向性は見出せない。

一方、移動アクセントを持つとされる22語は、BA型が優勢である。22語のうち、*колбаса*「ソーセージ」など14語が規範形として、*ольха*「ハンノキ」など4語がバリエーションとしてBA型を示している。また、変化の方向について言えば、AA型、BB型、AC型、CA型を古い形とするものがBA型を規範形あるいは«и»の注記を持つバリエーションとして持つようになっており、もとの型にかかわらずBA型への変化が生じていることを窺わせる。

#### 4.2.3. 接頭辞を持つ語のアクセント

ここで扱うデータの中で、Кузнецова, Ефремова (1986)により接頭辞を持つと認定できる語は12語であり、うち1語が移動アクセント型である。接頭辞はその種類によりアクセントへの影響が異なることが知られているが、ここでは数が少ないためまとめて扱う。このデータの範囲では、単純語と比較して、バリエーションも含めて語頭(すなわち接頭辞)にストレスが置

かれる割合が高い（例，規範形で *'за-сух-а* 「干ばつ」，*за-'сск-а* 「バリケード」）。例が少ないが，注記からはどちらかといえば語根から接頭辞へのストレスの変化の傾向が見られる。

規範形	и	допус- тимо	не рекомен- дуется	непра- вильно	устарелое	устаре- вающее	その他
I-6(1)		II-1(1)	II-1(1) BB-1	III-1(1)	II-1(1)		
II-4(4)				I-1	I-3		
III-1(1)							

移動アクセントの *по-хорон-ы* 「葬式」は複数形のみが用いられるとされ，複数形の移動アクセント型（主格形で語頭，生格形で語幹末，与格形で語尾にストレスを持つ形）を規範形とするが，«не рекомендуется» の注記を伴う語頭固定アクセントも挙げられている。

## 5. まとめ

本稿では，現代ロシア語の名詞パラダイムにおけるアクセントの型のうち第2変化名詞を取り上げ，文献から推定されるゆれと変化の方向性についてデータを分析した。その結果，20世紀の文献でも指摘されてきたBA型への変化が，現在も多くの第2変化名詞において生じていることが確かめられた。ただし，一定の接尾辞を持つ語や語構成によっては，この変化は認められていない。また，変化の到達する速度は，語幹の音節数や出沒母音の有無とも関わりがあることが示された。

本稿は，実際の話者を被験者とした調査を計画するための予備的調査に過ぎず，また，ここで扱っていない名詞も多く残されている。今後もさらなる調査が必要である。

## 参考文献・資料

- Аванесов, Р. И., Ожегов, С. И. (ред.) (1959) *Русское литературное произношение и ударение*, Государственное изд-во иностранных и национальных словарей.
- Булаховский, Л. А. (1954) *Русский литературный язык первой половины XIX века.*, Государственное учебно-педагогическое изд-во министерств просвещения РСФСР.
- Борунова, С. Н., Воронцова, В. Л., Еськова, Н. А. (1983) *Орфоэпический словарь русского языка*, Русский язык.
- Воронцова, В. Л. (1979) *Русское литературное ударение XVIII-XX вв.*, Наука.
- Востоков, А. X. (1831) *Русская грамматика* Александра Востокова, по начертанию его же сокращенной грамматики полнее изложеная, Типография И.Глазунова.
- Горбачевич, К. С. (2004) *Словарь трудностей современного русского языка*, Норинт.
- Зализняк, А. А. (1985) *От праславянской акцентуации к русской*, Наука.
- Иванова, Т. Ф. (2004) *Новый орфоэпический словарь русского языка*, Русский язык – медиа.
- Иллич-Свитыч, В. М. (1963) *Именная акцентуация в балтийском и славянском*, Изд-во Академии наук СССР.

- Колесов, В. В. (1972) *История русского ударения. Именная акцентуация в древнерусском языке*, Изд-во Ленинградского университета.
- Крысин, Л. П. (2008) *Иллюстрированный толковый словарь иностранных слов*, Эксмо.
- Кузнецова, А. И., Ефремова, Т. Ф. (1986) *Словарь морфем русского языка*, Русский язык.
- Редькин, В. А. (1971) *Акцентология современного русского литературного языка*, Просвещение.
- Резниченко, И. Л. (2008?) *Словарь ударений русского языка*, Аст-пресс.
- Розенталь, Д. Э., Теленкова, М. А. (1976) *Словарь трудностей русского языка*, Русский язык.
- Суперанская, А. В. (1968) *Ударение в заимствованных словах в современном русском языке*, Наука.
- Ушаков, Д. Н. (ред.) (1934-40) *Толковый словарь русского языка*, Государственное изд-во иностранных и национальных словарей.
- Хазягеров, Т. Г. (1973) *Развитие типов ударения в системе русского именного склонения*, Изд-во Московского университета.
- Федянина (1982) *Ударение в современном русском языке*, Русский язык.
- Чернышев, В. И. (1908) *Законы и правила русского произношения, Избранные труды в двух томах*, Просвещение, 1970.
- 安藤智子 (2010) 「現代ロシア語名詞アクセント法にかかわる形態論的・音韻論的条件の関係について」『富山大学人文学部紀要』53: 25-49.

## 注

- 1) Воронцова (1979: 40)は21語と記述しているが、引用されている例は18語である。
- 2) Резниченкоの辞書は書誌情報が明確でなく、出版社のHPによれば2010年刊行とされるが、筆者が入手した年は2008年であったため、本稿では刊行年を(2008?)としておく。
- 3) Ушаков(1934-40)としてВоронцова(1979)が言及している辞書について、筆者は第1巻が1935年に刊行された版を参照した。この版の記述は、わずかではあるが本稿2.2節、2.3節で紹介したВоронцова(1979)による説明とくい違う点があるため区別して、以下では筆者が参照したものを「Ушаковの辞書」と呼ぶ。